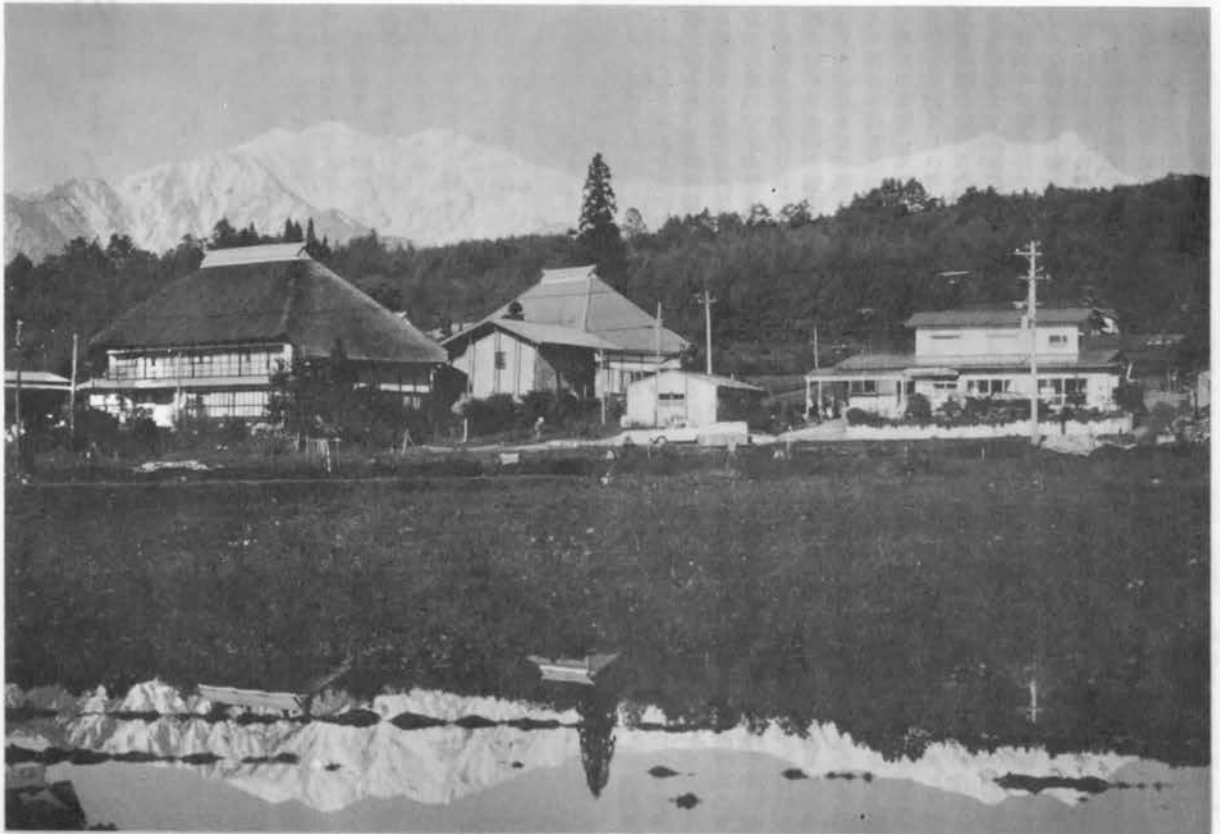


山と博物館

第25巻 第11号

1980年11月25日

大町山岳博物館



鹿島槍新雪、左は爺ガ岳(美麻村新行より10月31日)

撮影 三石 紘

鹿島集落のこと

鹿島槍ヶ岳、その昔は鶴ヶ岳と言ったと今は亡き年寄りが私の子供の頃に話してくれた。その訳は爺ガ岳の種蒔爺さんのように五月初旬に、鹿島槍南方の下部に雪の消えた岩肌が鶴の立姿になって見えるのである。

いつの時代から鹿島槍になったのか聞かずに残念でしかたがない。鹿島部落は戸数十一戸で人口は三十九人。戦前までは林業が主な仕事であったが今では殆んど外部に勤めている。昔から戸数は増減することなく、ここに住みついてどの位になるのかわからない。年寄りの話では平家の落人とか。だが大正末期から昭和初期にかけて火災があり書物は何も残っていないので何んとも言いがたい。米も現在では自給以上に収穫があるが、昔はさぞ苦しかったと思われる。一般的に鹿島といえば山奥のイメージがあるが、今では道路が整備され十五分位で大町へ出てしまおうし、学校へもスクールバスが通って便利になった。健康のためには少し位は歩いた方がよいと思うが、時代だからしかたがないだろうか。

鹿島は共有地が広くその権利は十一戸平等で、そこらあがる利益で部落に係る経費を全部まかなっている。だから各戸から負担金は全然とらない。今年には部落水道の修理に約五〇〇万円もかけたが個人負担は一銭もとらないですんだ。

考えてみると戸数十一戸が減らないという事はこの辺にもあるように思う。また増えない理由は共有権を十一戸以外は認めないできた事だと思ふ。自分達の生活を守るため昔の人達が考えそれが今日まで受け継がれてきたのである。戦後新しい民法により鹿島に生れた人達には平等の権利が認められる事になった。先頃の鹿島森林生産組合の設立をみて、この共有地を守り、また自然の中で私たち鹿島に住む人にとってより良き方向へと前進すべく努力しなければならぬと考える今日此頃である。(大町市議会議員 宮坂源治)

鹿島槍ヶ岳周辺のコース

松原 繁

安曇平から眺めて正面に美しく双耳峰を天空に突きあげているのが鹿島槍ヶ岳である。左に穏やかな爺ヶ岳、右に何本かの岩稜を持つ五竜岳、両峰を従えて正に堂々としたものである。

加賀藩主前田家に伝わった越中古図の中に立山背後を走る大山脈が登場してくる。皷鬼ヶ嶽(五竜岳)、上駒ヶ嶽(白馬岳)、後立山(鹿島槍ヶ岳)、現在我々は、後立山という名を山脈の総称と呼んでいるが、今から二八〇年前は後立山とは鹿島槍ヶ岳を指していたのである。高さは白馬岳が二九三九、鹿島槍ヶ岳が二八八七と二番目ではあるが、越中側から眺めた鹿島槍ヶ岳も、信州側から眺めた鹿島槍ヶ岳もやはり後立山の盟主というほかなかつたのである。

さて、この鹿島槍ヶ岳をめぐる昭和一〇年から二〇年頃にかけての積雪期の登攀記



鹿島槍ヶ岳(2887m)

録を読み、あらゆる条件の進歩した現在からみると、非壮な感さえうかがえるのである。特に鹿島槍ヶ岳北壁にはその感が強い。

鹿島槍ヶ岳北峰から長野県側に派出した天狗尾根と主稜線の間にはU字状に囲まれた典型的なカールがある。この谷をカクネ里と呼ぶ。何かロマンのある呼方ではあるが、このカクネ里の雪渓を登りつめた突きあたりが、鹿島槍ヶ岳の北壁である。この北壁にはバリエーションルートが、一五ルートほど開かれているが、いずれのルートも積雪期の登攀については、数々のドラマが展開されたのである。

又、北壁よりはやや規模は小さいが北峰から派生した尾根が荒沢の頭で天狗尾根と東尾根に分かれ、その両尾根にはさまれているのが荒沢である。荒沢は北俣と南俣とに分れ、北俣の奥の中央に懸著なルンゼが落ち込み北俣と南俣とに分けられているが、この北俣上部の岩壁が荒沢の奥壁である。この二つの岩壁は里からはあまり眺められないが鹿島国際スキー場から遠見尾根につながる黒沢尾根からの展望はすばらしいものがある。ちなみにこの黒沢尾根には、五竜遠見スキー場から小遠見山を経由して佐野坂スキー場へのトレッキングコースが開かれており、ブナの原生林を楽しむながら歩くのも秋山の魅力の一つといえよう。

さてこの鹿島槍ヶ岳へのコースの内一般的なものについて紹介します。
赤岩尾根から鹿島槍ヶ岳へ
大谷原で車は行止まりである。工事用の巾



鹿島槍ヶ岳北壁とカクネ里

広い道路が西俣の出合まで通じている。赤岩尾根の急な登りに備えて、ゆっくりと周辺の紅葉を眺めながら歩きましょう。小冷沢との出合近くの道路の右側に、沢山の木のついた栃の木があり印象的です。この車道の右手には東尾根への取付があり赤布が枝にいくつも結び着けられている。

赤岩尾根の取付は西俣の出合から北俣の河原を登り本流に架かる小橋を渡るが、西俣出合の西沢の落口はブッシュにかくれていて上部に爺ヶ岳の奥壁が広がっていると想像もできないくらいにひかえめである。この沢の落口で水の補給をするのも楽しいひとときである。赤岩尾根の取付から高千穂平までは樹林帯の急登で、ときおり紅く染った木々の間から爺ヶ岳の奥壁がうかがえるほかはこれといった眺望はきかない。木の根とスラブ状の岩に気を付けながらひたすら登る以外にはないが、赤岩尾根の主稜線に出てしばらく登り通称「公園」と呼ばれる丸木橋を過ぎると

左手に大きな岩があり右手には大きな梅の木のある場所に着く、この梅の木には冬山用のデボに使われたロープや、ナイロンのひもがまきついていたり、下には錆びた一斗カンが散らかっている。用事が済んだならばきれいに片付けてほしいものである。

ここから道は西俣側のガレた斜面に出るが道は良く整備され、新しいハシゴも作られていて歩き易い。見通しの悪い樹林帯の中を尾根上に出て右に、左にのみならず急登が続くやがて窪地状のところを行くようになると、もう高千穂平は近い。やがて樹林帯がきれ視界が開けて指導標のたつ高千穂平になる。

ここはハイマツと岩によって作られた尾根上の平坦地で、鹿島槍ヶ岳の北俣本谷側の全とど、双耳峰の美しさはみごとである。しばらくこれを忘れ地図を広げ本谷側の尾根と壁を眺めると、左から小屋裏尾根、布引東尾根、鎌尾根、ダイレクト尾根、荒沢の頭、東尾根第二岩峰、二ノ沢のゴル、二ノ沢の頭、数年前の正月の遭難者が二ノ沢のゴルから西俣の出合まで流されたことも記憶に新しいことである。又左手には爺ヶ岳の奥壁が仰がれ奥壁にへばりつくようにして、冬をひかえるべく、葉を落とし、いじかめられたように枝を伸ばしたダケカンバの姿がなんともいじらしく思われる。

ここから先はほぼ尾根通しの道で、ダケカンバが左右の谷に枝を広げたあたりを過ぎれば、赤褐色の露岩に出る。高千穂平からの登りも結構急登である。尾根の名前が赤岩尾根と呼ばれているのも、この辺の地肌が赤褐色であるからだろう。この露岩を左手に登ると道は水平になり眼前に中岩沢の源頭をトラバースして主稜線に続く道が見える。

赤岩尾根の悪場といえ、このトラバースへの登りと、そのトラバースである。崩れ易い岩場の右手を通り、不安定な岩をホールドに左手を十指位登るとトラバースへの道とな

る。凍っていたり、霜柱で道が滑り易い状態ならば気持を落着かせて慎重に登りたいものである。国境稜線に出たところが冷乗越である。ここにはりっぱなみかげ石で作られた道標があるが下りのこともあるのでしつかりと確認しておきたいものである。縦走路を右に向い樹林帯まで下りて再び登り返すと冷池山荘の前に出ることになる。小屋の囲りは、ナカマドの紅葉が美しい。山荘の前に水溜りのようにあるのが冷の池で、小さな看板が申訳けなきそに立っている。

鹿島槍ヶ岳の頂上へは山荘の前を通り、森林帯を抜け稜線の長野県側を登る。このあたりは夏に訪ずれるとお花畑が広がっている所である。道は黒部側にうつりハイマツの間をジグザグに登ると布引岳に着く、ここからは頂上までずっと黒部側を通って行くことになるが、黒部側と長野県側とは対称的な地形をしている。

ゆつたりと黒部側に続く尾根と山腹、急峻で谷底まで一気に落ちている長野県側、この地形は非対称山稜といわれ、フォッサマグナの影響と、長野県側に雪庇が多く張出すことが要因となっている。

この布引から頂上までの縦走路から黒部側に見られるダケカンバの林はみごとなものである。あたかも人間がリンゴの木を育てたかのように、木の高さも枝の状態も一様にそろっている。二年ほど前の十一月仲間にこれが黒部のリンゴ畑だと教えたところ、彼は本気になって信じ込んでいた。

ここからはたいした登りも無く頂上に着く。頂上からの展望はいまでもなく三六〇度のパノラマであるが、冷乗越で眺めた剣岳と頂上で眺めた剣岳とは趣きが異なる。剣沢や、源次郎尾根、長次郎沢、八ツ峰、三ノ窓の左にチンネの岩壁も眺められる。

里から見上げた鹿島槍ヶ岳の頂上にいま立っていることの幸せは深く心に残ることであろう。

大谷原 〇〇 西俣出合 〇〇 高千穂平
三〇〇 冷乗越 〇〇 鹿島槍ヶ岳頂上

扇沢から爺ヶ岳―冷乗越

登山口は扇沢の橋の手前を右に入った所で、取付から森林帯をジグザグと右に登りつめると尾根上に出る。頭上をテレビのケーブルが通っている。しばらくはこのケーブルにそって道は続きアンテナを過ぎると道は尾根の右側になる。ここからは安曇平を一望することが出来る。

再び尾根上に出て道は扇沢側をまくように続く、この尾根は爺ヶ岳南峰から派出している爺の南尾根である。あまりジグザグも無くゆつくりとした森林帯の登りで、左側の岩小尾沢尾根の紅葉がすばらしい美しさで目に映る。しばらく登ると視界が開けて蓮華岳や針



種池付近より剣岳を望む

ノ木谷に続く針ノ木峠、その右に針ノ木岳、スバリ岳と連る。この二つの峰は大町から望むことができないので特に印象的である。ちなみに針ノ木谷は富山県側の谷で大町側は麓川谷である。

階段状の木根を過ぎコンクリートで固められたケルンを見ながら登ると種池の小屋が稜線に見えてくる。小屋まで一時間半と黄色のペンキで書かれたスラブ状の岩の上を通り過ぎ石畳の道で高度をかせぐと、左側に深く落ちこんだ沢にでる。扇沢の右俣である。この沢をトラバースして、こんどは西方に道は変わるが年々沢の崩落がはげしく、上部がだいぶ崩れているので落石には注意が必要である。トラバースして右手をへつるようについて道がつけられているが、足元が切落ちていてこのコースで一番いやらしい場所である。

ここを過ぎると扇沢を左側背後に見下すようになる。大きなダケカンバの下を通り稜線に向って直上するように登ると急に視界が開け、爺ヶ岳南峰から種池小屋への主稜線が、スカイライ

ンを描いて下りてくる。小屋の近くの池のあたりは見晴しもよく、黒部川に落ちこむ立山、剣の眺めが雄大である。爺ヶ岳南峰への登りは稜線歩きのもっとも楽しいひとときである。シラビソの林を抜けると頂

上までは単調な登りで、ライチョウやホシガラスが歓迎してくれることであらう。縦走路は頂上を通りザクザクの下りとなるが、頂上のおびただしいケルンには心痛の思いである。頂上からは麓川谷を埋める紅葉の美しさにしばしば目をうばわれる。

中間峰とのコルまでは一気に下るが足元が不安定なので気を付けたいものである。このコルの付近は、夏にはこま草がきれいに咲いているが、種池と冷池の間の縦走路で見ることのできるのはいくらである。

コルからは、黒部側のハイマツ帯に道は続く、黒部川の広い斜面はぎつしりとハイマツで埋まり、所々にシラビソの木が直立しているさまは、まったく壮快でこのコースの魅力である。楽しいハイマツ帯を過ぎシラビソの森林帯に入ると道は冷乗越の下りになり、赤茶けたザレを下ると、赤岩尾根との分岐点冷池乗越に到着する。

扇沢 〇〇 種池 〇〇 南峰 〇〇 冷乗越 (大町山の会)



鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳周辺図

御岳山の噴火とライチョウ

平 林 国 男

御岳山は昨年(一九七九)十月二十八日午前五時二十分、長野・岐阜・山梨・福井・石川県など広い地域の地震計に記録を残した山体の振動とともに突然活動が始り、史上初めの噴火として人々を驚かせた。

噴火活動の最初は爆発音もたえず、噴煙も白く小さいものであったようである。その後噴煙は少しずつ激しくなり、山麓での観察によると午前八時三十分頃から灰色・暗灰色となつて一段と激しさを増した。午後二時頃活動の極大期を迎え、山頂の神社や山小屋に被害をあたえ、北東山麓の開田村などでは火山灰の降下が激しくなつた。この噴煙も二十八日夕刻には弱まり始め、一昼夜たった二十九日朝には著しく衰えをみせたといわれる。

ところで、この御岳山にはライチョウがすんでおり、私達は昭和四十六年(一九七二)に全山の生息実態を調査したことがある。噴火活動が彼等の生活にどのような影響をあたえたか、強い関心をもちながら調査の機会をとれないまま彼等の生活を案じていた。

たまたま、今回の火山活動を調査された富山大学教養部の小林武彦氏からいただいた報告書により、火山活動や噴出された火山灰などの状況を知ることができ、ライチョウに及ぼした噴火活動の影響について、机上での考察を進めることができた。

ライチョウの年間の生活はナワバリ期と非ナワバリ期に分けて考

えることができる。ナワバリ期は春の雪がけが始まる三月頃から雛がふ化する六月下旬頃までで、雌雄のつがい単位でナワバリをつくり、その中で巣をつくり、卵を産み、卵をつくるため、雛をかえす。この間、餌場や眠る場所など生活のすべてがナワバリ内で展開される。そのためナワバリにはこの間に必要な諸条件がそろっていないと成育できない。広い高山帯でもこの条件が充たされる範囲は限られており、一般的にナワバリが多く分布する地域は条件が恵まれているとみてよい。なお、限られた

範囲であるため毎年ほぼ同じ場所に同じようなナワバリがつくられる傾向が強い。条件として重要なことは餌場や巣づくり場となる植物群落が最低面積以上に確保される必要がある、これらの植物群落はいずれも比較的背丈の低い群落であるため、火山灰が五センチ以上積ると利用できなくなる。雛がかえると非ナワバリ期に入る。この期にはナワバリが解消され、雌親はナワバリのあった近くのお花畑に雛を連れだし、高山植物の芽や葉や花や実をついばませて雛を育てる。彼等の主な食物は植物質で高山植物をたよりに生きている高山鳥といえる。新雪が来ると、雛は一人前になり、同じ地域で生活していた親鳥や成長した雛の全部が合流して、厳しい高山の冬の集団生活に入る。

非ナワバリ期の生活で欠くことのできない場所は、雛を育てるお花畑と、雪におおわれた高山で餌になる植物が雪上に出ている場所である。このような場所はいずれも背丈の低い植物でつくられた群落で、火山灰が五センチ以上おおうとほとんど全滅する群落である。今回の御岳山の地獄谷を中心とした火山活動による噴出物は、高山特有の偏西風に流された。このため、噴出物の降下によって被害を受けた地域はナワバリ分布の最も少ない地域で、生息や繁殖に利用する主要な地域ではなかった。また、御岳山全域で確認されたナワバリ三十一個(推定ナワバリも含む)のうち、噴出物の影響を受けたと考えられるものは四個だけである。繁殖の基盤となる植物群落や餌が欠乏する冬期の主要な餌場はほとんど影響がなかったとみてよさそうである。

史上初めてと騒がれる御岳山の噴火も、ライチョウにとってはたがたびある火山活動として、活動の様子などすべてを知りつくしていたのかも知れない。

(大町山岳博物館 学芸員)

博物館だより

オオハクチョウ飛来

去る11月13日1羽のオオハクチョウが木崎湖に飛来しましたが居つくことなく翌日はどこかへ飛び去り、11月25日、今度は青木湖に1羽が飛来したとの連絡が入りました。この2羽のオオハクチョウは別の地へ行く途中にこれらの湖に立寄つたものと思われま

注 前号加藤の「図」、六月十五日のデータは吉岡善氏(名古屋大学大学院)の御厚意による。

山と博物館 第25巻 第11号

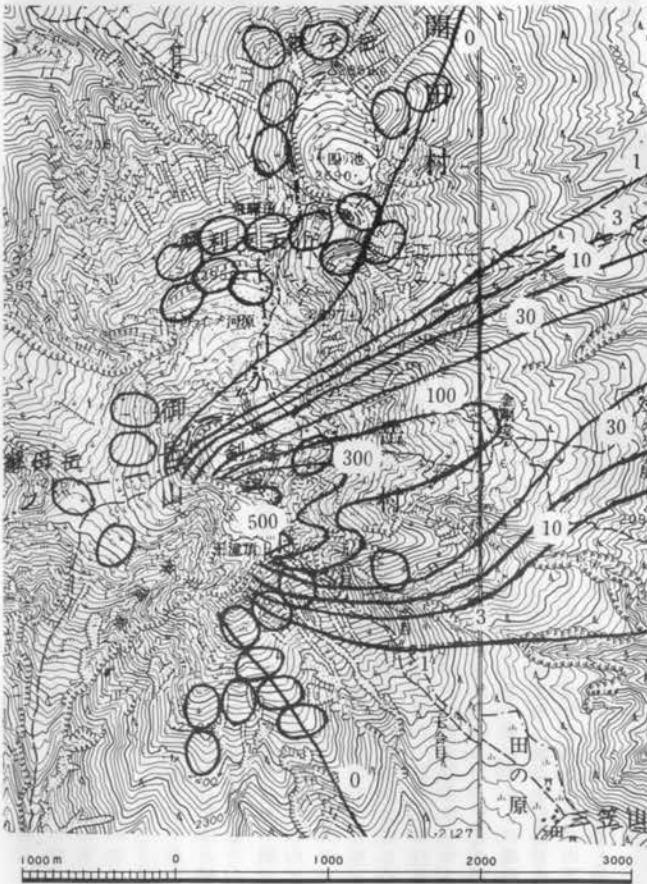
発行所 長野県大町市TEL②〇二二一

印刷所 大町山岳博物館

定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号(長野一三、二九二)

大糸タイムス印刷部



ライチョウのナワバリと火山灰分布図

○印はナワバリ、厚さの単位はmm。火山灰分布図は「御岳山1979年火山活動」(小林1980)より、ライチョウのナワバリは「御岳のライチョウ」(羽田・平林1972)より、(国土地理院発行5万分の1地形図「御岳山」,「木曾福島」使用)